

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
しみず 蝸牛					和永 幹子 米山 ことは 大越 ありぎりす 六弦		総太郎 彩香	しみず 破れ蓮		のり子 月 を 暦文 はっち しーしー 名負人		光雲2 梗舟 ありぎり す		ねこ はっち 凡士 ひろ志 風子
烈風の鳴咽めきたる虎落笛 比喩表現が秀逸。中七が効いている。	帰り花ながき夢より目覚めけり	薦蔓足に絡ませ枯野道	赤蕎麦の畑に残りし落暉かな	この家のこの木の冬芽しもぶくれ	誰か居てだれかがゐない年の暮 老いとは、別れることです。納得します。しみじみとした一句です。ね。単身赴任の夫が帰ります。息子はスキー旅行祖父は入院色々想像できまろ。抽象的すぎるかなと思ひます。中七の措辞にひかれました。変わらないように少しずつ身辺は変わって行くものですね。	干し大根白き小舟が雲に乗り	冬鶏や仰向いて飲む粉薬 季語に付かない中七下五の日常の癖の動作との取合せに感服。	池涸れて顰になりぬ捨小舟 情景に対する強いインパクト。冬ざれた池の光景が広がる。	竹馬や前傾にして歩き出す	毛糸編む泣くのは3日ほどがいい 最近3日位で忘れられればいいな。「三日」がうまい。早く立ち直ってください。	案の定京は時雨て路地の店	木漏れ日をはらりと乱す落葉かな 下五の季語が良い。	冬夕焼心と和むや山の鐘	太陽にいのち丸ごと日向ぼこ 「いのち丸ごと」の表現が秀逸。いのち丸ごとの言葉選びが良かった。日向ぼこの本意ですね。中七が秀逸。
破れ蓮	新井のり子	ひろ志	衛	しーしー	光雲2	しみず	ありぎりす	松田素風	森佳月	つぶ金	檜鼻ことは	米山カロ ーリング	宇田靖之	展平

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十二月
土璃 梗舟 ありぎりす		暦文	米山 絵夢 六弦	つぶ金 わがん	龍野 大越 風子	破れ蓮		ねこ 名負人	たくみ	霜里	春駒 寒立馬	癒香	龍野 かれん 風子		
待合にポインセチアと猫駅長 「ポインセチア」と「猫駅長」の取り合わせが面白いと思います。 のどかな駅舎が想像されます。ポインセチアと猫駅長の取り合わせの 妙ですね。	巨星墜つ空はスカスカ十二月	温泉にヘルパー二人小晦日 お仕事お疲れ様でした。	家々の呼吸を止めし雪の朝 呼吸止めるが良い。家を生き物として、白さと静けさで世界が一度リ セットされたよう。静かな雪の朝です。	顔寄せて声を聞きたし冬堇 五千石氏の詩情を感じます。言いたいことがあれば小さな声で言うの でしょうね。可憐な表現です。	大津絵の鬼も出払ふ師走かな 年末のあわただしさが伝わる。先生だけでなく鬼も多忙な12月。	参道の樹相あらはに枯木立 参道の落葉した様子を上手く捉えている。	春待つや孫の高砂父になる	もの持たず余白深まる年の暮 「余白深まる」の表現が秀逸。	子を首に巻いて枯野の父となる 不思議さの力技。	冬ざれや喪の葉書つむ机かな 年の瀬の静かな喪失感。	冬ざれや売家の旗はまだそこに 人氣のない売家と冬ざれという季語が寒々としていて秀句。季語を活 かし季語を信じる。その情景をしみじみ感じた。	襟巻に老の息さへ暖かし なんとも可愛い。	一人来て風となりゆく枯野かな 枯野の寂しさが伝わる。広い枯野の中に風に吹かれて佇んでいる様子 が出ている。枯野の寂寥感よく出ている。	格好いいのに豚になってる風邪っぴき 網野月を	
高田はっち	神谷たくみ	高原ひろし	春駒	かれん	河野凡士	安田蝸牛	和田イチ子	しんい	森下山菜	高松和永	大越マー ガレット	新 暦文	荒一葉		

水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十二月														
45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
	彩香	癒香	龍野 わがん				瞳人 田猫	のり子	和永 山菜		荒一葉 佳月 楽 大越 霜里	ねこ 癒香 しんい 月を 展乎 田猫 かれん たくみ ひろ志	かれん しみず 山菜 しーしー	春駒 六弦
新酒垂れ五感の機微や櫂伝ふ	古の乳香纏ふ聖夜かな	夕映えはステンドグラス冬夕焼け	顔見世や胡坐啖呵の緋縮緬	柿の実のずっしり重く枝垂るる枝	透けてゆく質疑日本のふゆ日差し	路地裏の隠れ家カフェや冬灯	極月のレーザー照射国を刺す	子ら寝入り静謐やぶる除夜の鐘	襞々に宿るひととせ山眠る	散り切らぬ公孫樹落葉や音うすく	幸せの滲む愚痴聞く年忘れ	美しき数式生まれ冬銀河	風の研ぎ澄ましたる絨月よ	マンションの灯の揃ひたる歳の暮
絵夢	癒香	雪待月田猫	染谷風子	丸井ねこ	峰岡名負人	岡崎梗舟	秋谷風舎	岡本たか子	青木鶴城	総太郎	わがん	龍野ひろし	小林土璃	岩清水彩香

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十二月
土璃 つぶ金	霜里 幹子		楽 蝸牛		土璃 光雲2 梗舟				総太郎 瞳人				寒立馬	彩香 俊之 わがん	
冬雲雀風の死角へ鳴きにゆく <small>冬枯れの中を動き回る雲雀をよくとらえていると思います。冬・風・ 死角が響きます。</small>	炬燵より返事のあれど待たされり <small>なかなか出られないんですよね。返事があつたものの、中々暖かい炬 燵から出られないのでしょうか。</small>	野辺山のパラボラ不動寒昂	児を看ての髪の湿りに湯ざめかな <small>経験者が多いはず。上五から中七への措辞が良い。</small>	駅前の列なす傘に細雪	革ジャンを脱ぎ装着す抱っこ紐 <small>中七がちよつと窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思い ます。生活感が滲み出てます。</small>	艶やかに紅き実七つ冬隣	新婚や四畳半間の置炬燵	新酒やぐい飲みひとつ椅子むつつ	雑炊やまたひと回り千支巡る <small>こちら七回りの午に候。</small>	落ちぬよう春へ抱きつく枯葉かな	酒酌みし窓の外には冬銀河	ハタハタの身ほろとほぐれ酒すすむ	首手首足首射抜くからつ風 <small>うまい句だ。北国で育つた方かな。故郷を思い出した。</small>	手のひらを合わせ手袋仕舞いけり <small>手袋を履いて手を合せ裏返して仕舞う仕草と小さな感謝がほのぼの。 日常の何気ない動作がかわいらしい。きょうちりとしていて物への愛情 を感じさせる。</small>	
光雲2	衛	しーしー	松田素風	しみず	ありぎりす	檜鼻ことは	森佳月	つぶ金	展平	米山カロ ーリング	宇田靖之	寒立馬	平野楽	霜里	

水明インターネット句会（選句・選評）																令和七年十二月																													
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61																															
絵夢		しんい		田猫						凡士 瞳人 名負人		荒一葉 佳月		のり子 俊之 しんい ことは はっち 展平 春駒				蝸牛		破れ蓮																									
数へ日の十度は覗く納戸かな		年の瀬、正月準備に忘れ物がないかなど年の瀬の”そわそわ”感が、ユーモラスに描かれている。		冬帝の統べる静寂や銀世界		澄みて無音の雪景色。		凍空や駅のホームのラーメン屋		ラーメンの湯気と季語の対比が鮮やかで、ラーメンをすすりたくなる句。		ほつとかれ不機嫌な猫年用意		バビロンの塔崩れゆく落葉期		初氷ひかり確かに風の紋		お湯かけて福呼ぶ七福詣でかな		枯蟪蛄懺悔の祈りも無かりけり		冬晴れや槌音高く廃屋跡		初恋の人のイメージが崩れた？それも同窓会ですね。		凧や会わなきやよかつた同窓会		夜回の夫待つ妻の手編み棒		静かな冬の夜が目には浮かびます。		メモ一つ消し一つ足す十二月		師走の慌ただしさを上手く表現。12月の慌しさ。日常のごく小さな所作に見る十二月が上手く詠まれています。12月は忙しい事をさらりと表現しているのがよかった。年末の忙しい様子が。することの多い年末の様子が伝わってくる。1、1、1、12の数字合わせも気持ちいい。		さわさわと竹の葉ずれよ小春の日		波の花舞ふ越前の荒磯（ありそ）海		越前の荒磯が表現されている。		くさめしておでん屋台の無礼講		ユーモラスな一句である。	
高原ひろし		安田蝸牛		かれん		河野凡士		森下山菜		和田イチ子		しんい		大越マー ガレット		高松和永		網野月を		新 暦 文		荒一葉		ひろ志		破れ蓮		新井のり子																	

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十二月
	寒立馬	荒一葉	幹子	楽 俊之									和永 光雲2	つぶ金 米山 山菜 しーしー 絵夢 月を	
Y o u T u b e またアヴェマリア師走かな	男には男の辛さ空つ風 「そうだなあ」と共感しながら沁みた。	数え日や窓拭く爺の力こぶ 老いにもまだ役割があるのは嬉しいのです。	にぎり川きみが育った冬の町 きみを思う気持ちをリズム感よくまとめられたと感じました。	数え日や棺の友のしたり顔 やるせない。此岸のあれこれから一抜けて嬉しいのだろう。	極月もモーゼの苦難恨む人	更科の蕎麦を食して大晦日	冬帽子みちのくの日の有難き	年用意表札の文字なぞりつつ	のうのうと妻の実家の置炬燵	そぞろ寒ハローワークの帰り道	帰り花ひとつ古い木に来てとまる	かくれんぼ鬼をみてゐる冬薔薇	去る君の靴音残る冬の月 コツコツという乾いた音ですか。	初時雨街へ迷子になりに行く 迷子になりたいときあります。迷子に行くと良い。すさまじく 諧謔を効かせた句で「迷子になり」が良いですね。季語が、 心の曖昧さ・揺らぎ・解放を見事に支えている。時間に余裕があつて 羨ましいです。	
雪待月田猫	染谷風子	岡崎梗舟	峰岡名負人	青木鶴城	秋谷風舎	岡本たか子	龍野ひろし	総太郎	わがん	高田はっち	小林土璃	岩清水彩香	春駒	神谷たくみ	

			102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十二月
									ひろ志		暦文	総太郎 佳月 展平		ことは 凡士 たくみ	
			カフエ ラテを 買はね ばなら ぬ冬木 立	初雪や エレベ ーター は最上 階へ	裸木の 隙間に 見えし 千切れ 雲	緑の本 一番上 にある 師走	年の瀬 の膨ら むスク ランブ ル交差 点	山茶花 や想い を馳せ る来し 方を	冬の夜 や赤き テント の町中 華	まったりと日だまりぬくし冬の朝	闇の世の 一陽来復 明けたり 来年こそ 良い年に。 恙なきが 一番。	何事も なく夕暮 れて冬至 粥	裸木の灯 りの化粧 にほひ観 に	のりたま のふくふ く香る冬 休み 読むほどに心が温まる一句です。超ロングセラーののりたま、のりたまだけで一膳いけたよ。ふくふくが効いてます。季語もぴつたり。	
			石川順一	石関六弦	佐藤幹子	石川順一	石関六弦	佐藤幹子	平野 楽	寒立馬	癒香	霜里	絵夢	丸井ねこ	